

特別企画 娘へ

もっと遠くへと走れ



なかじまみねお
中嶋嶺雄 ●東京外国語大学教授

これも或いは年齢のせいかもしれないが、近頃は自分の専門以外の事柄について、エッセイ風の原稿を書く機会が多い。そのような原稿の執筆の時には楽しいことでもあるので、余程多忙でないかぎり、お引き受けするのだが、今回かぎりは、かなり逡巡せざるを得なかった。「娘へ」と題して、何か父親としてのメッセージを発するだけの心の準備が出来ていないからだとさえいえるが、より直截に語れば、二人のわが娘のうちで長女がこのと

ころ父親に反抗的で、いささか鬱屈した心理状態のところへ、この原稿依頼が飛び込んで来たからである。

私には、男女四人の子供があり、長男が大学院生、長女が大学四年生、次男が同二年生、次女が同一年生と、わが家は大変賑やかな時期である。妻と私の母との七人家族のだが、加えてわが子たちが全員AFS(アメリカン・フィールド・サーピス)留学生として高校時代にアメリカへ留学したこともあり、わが家にはしばしばホーム・ステイの外国人が滞在する。この九月からも長女のアメリカ時代の友人が滞在するというので、長女はいまから浮き浮きしている。

いずれにせよ、当面のわが家では、長女と私の角逐が一つの焦点なので、この稿も長女を中心に書くことにすると、右の一件でも若干の「父娘戦争」があった。

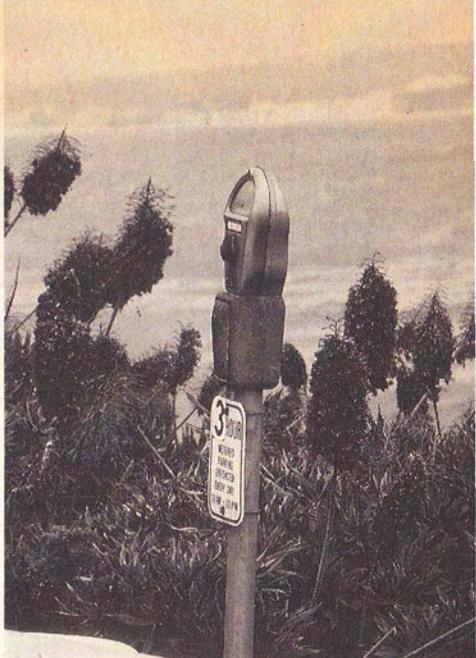
私は自分が一人っ子として育ち、畏友の飯田経夫氏のように、見事な「子離れ」(『PHP』一九〇年二月号、参照)が出来なかったためか、長



特集:自分を大切に生きる人

◎特別企画 一家族「娘へ」





爾来、娘はインドや中国やトルコへと一人で出かけてゆき、たとえば内モンゴルでは奥地の東勝から中ソ国境の満洲里まで、あの中国人の乗る硬座の車輛で何日間も単身旅行して平然としている。

だから、机に向かつて落ち着いて勉強するということがほとんどない、と看做して父親はつい小言を言う。自分の部屋にいるときは、友達との長電話か、真夜中にしばしばかかってくるあれやこれやのボーイ・フレンドからの電話ばかりである。大学生も四年生になれば、卒論の準備もあろうし、就職や進学準備もすべきなのに、それらを一切放置していて、この春休みには、トルコ語の勉強だと称してイスタンブールへ行ったまま二カ月半も帰ってこなかった。

だから、この秋あたりからは、本腰をいれて勉強すべきなのに、今度はまたホーム・ステイの米国人を自分の部屋に迎えようとしている。父親としては、大学四年生という重要な時期にそこまでしなくても思うのだが、そんなことを口に出せ

女の進学した大学が私と同じ大学になってしまった。だが、この点は決して親の強制ではなかった。長女は、中学生の頃に、イギリスのモンゴル人学者として名高いオノン・ウルグング先生『わが少年時代のモンゴル』（学生社）を読んで大層感動したらしく、将来はモンゴルの草原を探訪するのだと言って、その頃から庭に板を引き、包（ゲル）に寝泊まりする真似をしていたのだから、娘がモンゴル語学科を選んだのは、あくまでも彼女自身の意志であつた。

ば、普段、国際交流の必要性を説いているくせに父親はなんと偽善的かと娘が反撥することは目に見えている。こうして、正面きつて父親が反対で

きないことを見抜いたうえて、娘は、米国人学生はイエールの大学院に進んだ才媛だからと、もつともな理由をつけて彼女との交流を楽しみにしている。これでは自分で専攻語学をみっちり修得し、デイシプリン（専門分野）を身につける時間がないではないか、と父親は苛立つ。

せめて、モンゴルがいま、急激に民主化しつつあり、面白いのだから、もつと関心を寄せてはどうかと、先日私の研究室の切り抜きの中の「モンゴル」の箱を娘に持ち帰ってきてやったところ、「そんなもの興味がない」と見向きもしない。その態度は何だところからも言葉を荒らげると、「今度の民主化だって、ソ連の真似にすぎない」、だから興味がないのだと言うではないか。

こうして、一事が万事、わが家ではこのところ父親と娘が行き違い、対立している。その娘が何かの折に、私のヴァイオリンのピアノ伴奏をして

くれるときなど、父親としての至福を感じるのだが、そんな時間は永續きしない。

わが娘は、こうして父親の言うことを聞かず、奔放に世界を駆けめぐり、日本にいるときも今日は富士山のラリーだ、明日はジャズ研だ、写真の展覧会だと出歩いてばかりいるのだが、いつになつたら、世の父親が味わう「父と娘」といった甘酸っぱい感情を味わわせてくれるのだろうか。

末っ子の次女は、鋭敏でドライな長女と性格が異なつてかなりウエットで情緒が濃やかである。

長女と私との間に立つて時には父親の「孤独」を慰めてくれるのが救いではあるけれど、おそらく長女は、自分の壮大な夢が実現するまで、父親の許に精神的には戻ってこないのではないか。だとすれば、わが娘よ。父親の感傷など、どうでもよい。三年前の夏、お前と一緒に内モンゴルの草原を旅したとき、私から解き放たれて遠くの丘まで駆け登って行ったときのようにも、もつともつと遠くへと走れ。だが、絶対に後を振り向くな！

長女の名前は科野と言ひ、次女は亜純と言ふ。